

韻文を書こう

詩を書こう

詩は日常生活での感動を直接歌い上げるもので、普通の文章よりも短い言葉で表現します。それだけに一語一語に情景や心情が凝縮されています。

1 題材を探そう

詩の題材は、学校生活・家庭生活・社会生活・自然や季節など、身の回りにたくさんあります。

○自然の美しさ・強さ・雄大さなどに対する感動

○日々の生活体験における楽しさ・うれしさ・苦しさ・くやしき・つらさ・悲しさ・すばらしさなどの様々な感動

《私の選んだ題材》

2 題材についてメモをとろう

心に浮かんだ場面や感動したことを探して書きとめましょう。

3 メモをもとに詩を書こう

(1) 次のような手順で詩を書こう

観察する

・何を書くか、題材を探し、じっくり観察しましょう。



感動する
発見する
想像する

・身の回りで起こったことや自分自身の心の中のことなどを思い起こしてみよう。
・題材のどこに感動したのか、どんな発見をしたのか、ひらめいた言葉でメモしてみよう。
・想像したり、空想したりすることにより、イメージを豊かに広げよう。



言葉にする

・自分の言葉で素直に表現しましょう。



表現を工夫する

・何行何連にするか、どんな構成にするか、どんな表現技法を使うか、どんな題にするかなど、工夫してみよう。

(2) 下書きをしてみよう

(3) よりよい表現を求めて推敲しよう

4 作品用紙にいいいに清書しよう

*文集「こだま」の詩を読んで、
参考にしよう。

《例1》

ハヤ獲り

ピカツ

水中で 何かが 光った
太陽が 水面に反射して
よく見えない
網にかかって
じたばたもがいている

—— よおーし

手を入れて

辺りを さぐった

ぬめりが 指先に伝わる

指の間を ぬけそうだ

—— 負けるもんか

両手で がっしりと

おさえつけた

—— やった!

ハヤのものがきが

からみあった十本の指に

そのまま伝わる

獲れたハヤを

太陽にさし出した

水しぶきが

ピカツと 光った

(文集「こだま」より)

《例2》

心の鏡

押し入れの奥から出てきた

銀色の缶

少し変形していて

僕の顔がゆがんで映る

何が入っているのか

ふたを開けてみた

中は笑った僕の写真でいっぱい

思わず手にとった一枚一枚

部屋に並べた

よく遊んだ オモチャ

よく遊んだ 友達

よく行った 公園

小さな缶いっぱいにつまっていた

なんだか胸もいっぱいになった

きれいに重ねてしまった

ついでに缶のゆがみも直した

ゆがんでいない僕の顔が映っていた

(文集「こだま」)

《例3》

差し出した手

差し出した僕の手

持っているだけで

たくさんものが積まれていく

要るものも要らないものも無造作に

幼かった僕は夢中で

手を差し出していた

多くのものを求めて

そして持ちきれなくなった時

橋から切り捨てて

その辺に置いてきた

振り返ってみると

僕の足跡しかない

僕が落としたものは

既に手の届かない過去に埋もれていた

初めて後悔した

差し出した僕の手にあつたはずの

あの重み

あの重み

あの重み

あの重み

あの重み

あの重み

あの重み

あの重み

あの重み

僕はこれからもまた
手にしてゆくだろう
今度は一つ一つ選びながら

この僕の手に取り込んでいこう
優しさも勇気も残さずに

そしていつか

僕の前に差し出された手に

一番のものを渡せる人になろう

僕が手にした すべてのものを

与える人になろう

(文集「こだま」より)